

農文化システムの総合的評価ツールの開発と地域比較に関する研究

島根大学研究機構戦略的研究推進センター 専任講師
NPO法人おっちラボ 代表・理事
島根大学 理事・副学長

濱野 強
矢田 明子
塩飽 邦憲

農林水産政策研究所では、新たな視点や長期的視野に立った政策研究を推進するため、大学、シンクタンク等の研究機関の幅広い知見を活用する提案公募型の研究委託事業を行っています。

今回は、その中から、「地域住民を主体とし、農文化システムを定量的・定性的に評価し、地域比較を通して独創性・独自性を明らかにする」研究について、その概要を紹介します。

1. 研究の背景

我が国の農村地域には、伝統的な農業・農法や地域固有の歴史・慣習、美しい景観、生物多様性が存在し、それらの持続的な利用を通して農文化が形成されてきました。そして、これらの農文化は、集落のガバナンスや住民間の関係性を包含した独創的なシステム（以下、「農文化システム」とする）として農村地域に伝承されています。しかし、近年、人口減少や高齢化の急速な進展に伴い農文化システムの消滅が危惧されていることから、農文化システムを定量的に評価し、地域比較を通して独創性・独自性を明らかにする試みがこれからの農村地域の維持・保全、ひいては活性化の推進を検討する上で有益な情報となります。以上の問題意識に基づき本研究では、農文化システムを評価し、かつ、地域が自身の強みに基づき今後のアクションプランを検討することが可能となる評価ツールの開発を目指しています。本稿では、これまでに明らかになった成果の一端をご紹介します。

2. 農文化システムの評価とは

本研究における農文化システムの評価の特徴は、地域住民、または地域課題解決への関心・技能を有する人材を主体とした取組を意図している点にあります。すなわち、農文化システムの評価が目指すところは、一連の評価活動が契機となり地域が進むべき方向性の確認や活性化へとつながっていくことです。したがって、評価項目の検討では、農文化に関する個別の構成要素について頑強な枠組みを論じるのではなく、むしろ緩やかな概念的枠組みの中で構成要素間の関係性を確認しながらその価値や各種課題を論じることが有用です。そこで、我々は、農林業センサスを用いたクラスター解析を実施して全体的な評価の枠組みと調査対象の絞り込みを行い、次いで地域調査を通して定性的な視点から構成要素間の関係性や地域が今後目指すべき方向性について具体的な議論を進めてきました。したがって、定量的・定性的の2つの視座に基づく体系的な検討が特

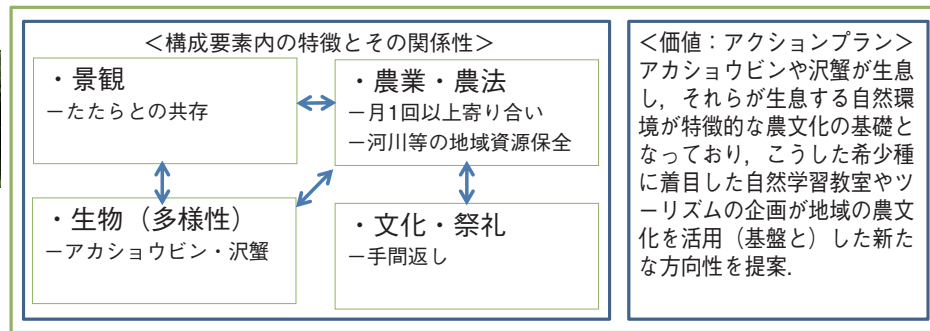
徴となります。具体的には、「景観」「生物（多様性）」「農業・農法」「文化・祭礼」の観点からこれらの関係性の把握を踏まえつつ、将来に向けたアクションプランの検討を実施してきました。そこで、以下では、地域調査の概要をご紹介します。

本調査対象地である島根県雲南市は、以前から本研究組織の研究者が多様な視点で共同研究を進めてきました。加えて、雲南市では、地域の課題解決に資する人材育成（以下、「地域プロデューサー」とする）を進めています。この取組では、将来の同市を担う人材育成を理念に掲げ市役所がNPO法人農家のこせがれネットワークや市内関係機関から構成されるワーキンググループとの連携・協力体制を構築し、地域課題解決に資する人材育成を目指した塾（幸雲南塾）を企画・運営してきました。そして、現在では、幸雲南塾の卒業生が地域資源の活用や課題解決を目指す組織「おっちラボ」を立ち上げ、地域住民と行政の橋渡し役として、また、地域課題に耳を傾け住民と共に解決を推進する組織として活動を行っています。こうした人材が本研究における調査の主役になっています。

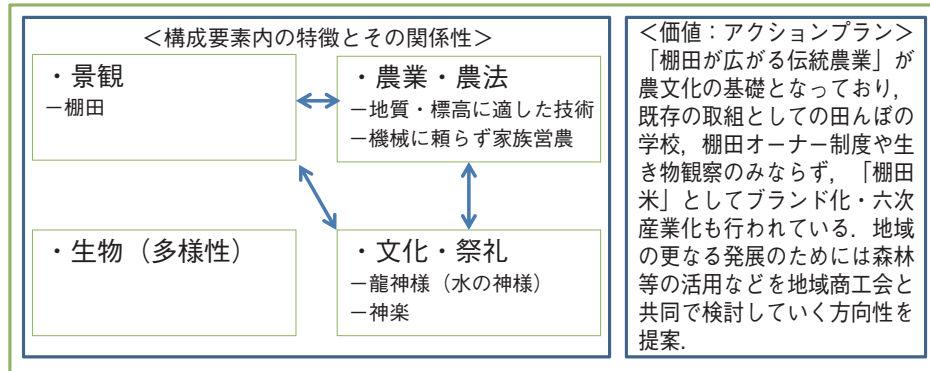
3. 農文化システムを測る

調査は、島根県雲南市波多、及び山王寺で実施しました。その理由として波多は、豊かな自然環境を活用した農業を基盤としながらたた製鉄や出雲大社参拝の宿場としての役割を果たし、また、山間部に位置する豪雪地帯であるため固有の文化・慣習を育んできました。また、山王寺は、「日本の棚田百選」に選ばれた地区であり、標高約300メートルに位置し、急峻なV字型斜面での農業の営みが固有の文化・慣習を含む農文化を育んできました。したがって、両地区は、景観や自然環境を維持・活用しつつ、特徴ある土地利用がなされ、さらに伝統的知識・文化が醸成されてきた地区と言えます。そこで、地域住民、地域プロデューサーと共に9日間のフィールドワークを通して上述の4つの視点の把握とその関係性の整理を行いました。その結果、両地区の農文化システムとして、以下の特徴が明らかと

波多



山王寺



注）収集した各構成要素に関する特徴の中で地区の強みとして活用できるものを抽出し、構成要素間の関係性を整理。そして、地域のアクションプランとして何を活用し、何にチャレンジすべきか、という論点を住民主体の目線で提案。→調査・計画・実行を体系的に展開できる枠組みを検討。

第1図 両地区の特徴

なりました。

波多地区の最も特徴的な点は、希少種の存在でした。アカショウビン・沢蟹が生息しており、その源としての澄んだ清流が住民によって保全されていました。地区では、月に1回以上の割合で寄り合いを実施し、また河川等の地域資源保全活動も行うなど一連の取組が生物多様性や豊かな自然を支えていることが浮き彫りとなりました。また、農とたたらは、一般的に拮抗する関係にあるものの、波多地区では両者が共存してきたと伝えられていました。その背景には、山あい位置することによる物質的な不足が結果としてこうした固有の農文化が形成されてきたものと推察されます。以上より、生物多様性や景観を維持・配慮した土地利用がなされ、そうした活動を基盤としながら伝統的な知識や文化が培われてきたと整理できました。

一方、山王寺地区の最も特徴的な点は、伝統的な農業・農法でした。急峻な地形であり場所により地形・地質・標高が異なるだけでなく、田んぼの区画面積も狭いことから人手による伝統的な農業が行われてきました。また、地区では、「はで」と呼ばれる木の枠組みに稲束をかけ天日で乾燥させる昔ながらの技術（収穫の時期に限り住民同士が共同で組み立てる）が継承されるだけでなく棚田の特徴を生かし景観との調和を意識した配置を進めていました。さらには、水が限られた地区であることから、神楽や神社といった神事が継承されてきました。以上より、条件不利な環境を伝統的な農業・農法を活用し

て持続的な発展を目指してきた地区であり、また、そうした取組が生活における伝統的文化も形成してきたと整理できました。

こうした特徴について関係性に基づき両地区のアクションプランを整理したのが第1図です。波多では、希少種及びそれらが生息する自然環境が特徴的な農文化の基礎となっていることから、自然学習教室やツーリズム企画の再構築が新たな方向性として示され、生物多様性や自然環境の保護を生活者の利益に結び付けるモデルが有用と考えられました。一方、山王寺では、棚田が広がる伝統農業を農文化の基礎とした棚田オーナー制等の既存の取組に加え、地区の高齢化、担い手不足対策として、定住促進につなげる新たな取組（森林資源の活用など）を地域商工会と共同で検討していく方向性が示されました。

4. おわりに

農村地域では、伝統的な農業・農法や地域固有の歴史のもとに独創的な農文化システムが存在しています。したがって、農村地域の振興や活性化の推進においては、農文化システムを評価し、その特徴に応じて今後のビジョンの形成や地域マネジメント（PDCAサイクルの構築）を進めていくことが極めて有用です。今後は、我が国の農村地域を包括的に住民自身が議論することが可能となるスキームとして定量的な評価の視点を加えて整理を行うとともに、地域調査の結果を踏まえた地域活動の推進が図れるよう研究を進めていく予定です。